書評·Book Review

魚類学雑誌 66(2):269-270 2019 年 11 月 5 日発行

岩波科学ライブラリー 286 結局、ウナギは食べていいのか問題. —海部健三(著). 2019. 岩波書店,東京. 119 pp. ISBN 978-4-00-029686-1. 1,200円(税別).

本書は著者の海部健三氏が本人のウェブサイト内のブログに 書かれた記事を基に、加筆修正を加えて出版されたものである. 表紙には「結局、ウナギは食べていいのか(中略)そのモヤモ ヤにお答えします」と明記されているものの、すべてについて その回答が用意されているわけではなく, あくまで読者が考え るための材料をさまざまな側面から提供するものとなっている. 本書は全8項目から構成され、すべての小項目において一般の 方が抱くと著者が想定する Question に対して、著者が冷静かつ 客観的な回答を詳述するという形がとられている. 内容の要約 として、第1章「ウナギは絶滅するのか」では、ニホンウナギ が絶滅危惧種に選定されたことや、著者らの研究グループによ る研究成果に基づいて、ニホンウナギがいかに減少しているか についての議論が展開されている. 第2章「土用の丑の日とウ ナギ」では土用の丑にニホンウナギを食べるという行為につい ての倫理観や代用魚に関する著者の意見が書かれている. 第3 章「ウナギと違法行為」では、鈴木智彦氏がウェッジ誌上(鈴木、 2015) で明らかにしたような、不正なシラスウナギの流通実態と、 その解決方法の私案が提示されている。第4章「完全養殖です べては解決するのか」では完全養殖技術(本誌読者には説明不 要だろうが、現在流通する養殖ウナギはすべて天然のシラスウ ナギを大きく育てた蓄養物である)がいまだ普及の段階になく, またその実現もかなり遠い未来の話であるということが述べら れている. 第5章「ウナギがすくすく育つ環境とは」ではニホ ンウナギがサケなどと異なり母川へ回帰するのではなく,海で 産卵し、川や湖沼、沿岸域で育つが、産卵個体の子供は東アジ ア全体に分散するため必ずしも元の成育地に戻るわけではない ことや, 自然の環境がダムや堰堤といった河川横断構造物によっ て分断され, ニホンウナギの遡上に支障を来していることを環 境省の委託調査を引き合いに説明されている. 第6章「放流す ればウナギは増えるのか」ではニホンウナギの放流とその問題点、 またヨーロッパウナギの事例を引き合いにその解決策の私案が 提示されている。第7章はワシントン条約について、第8章は 消費者の行動についての著者の意見である.

本書に書かれている事実の中には、本会の会員の多くにとってはすでに常識となりつつあるような内容も数多く含まれている。とはいえ、残念ながら一般の方との認識のギャップは未だに大きいことは事実で、たとえばニホンウナギの産卵海域が日本からはるか遠いマリアナ近海であることや、いわゆる養殖ウナギがすべて天然のシラスウナギを育てたものであるということすら浸透しているとは言い難い。著者による前書「ウナギの保全生態学(共立出版)」が主としてそれまでの知見をまとめて整理するに留めたもの、保全生態の一般則に基づく対策や提言を列挙したものであったのに対して、本書ではこのような基礎的な知識に加えてかなり踏み込んだ提言や、これまで一般書には書かれることのなかった事実が丁寧に描写されており、これまで

に出版されたウナギー般書とは一線を画したものとなっている. このような本を出版するには相当の勇気が必要であろうことに, 著者に対して純粋に敬意を表したい.

本書の内容は大筋では同意できる一方で、各論では誇張的な 表現が散見されることに注意されたい. たとえば、第1章で岡 山県の3河川で行なった調査で捕獲された161個体のうち,98% が放流由来の個体であったと書かれているが、この箇所で引用 されている原典(Kaifu et al., 2018)を確認するとこれは淡水域 に限った話であって、汽水域では18-91%とかなりの幅がある ことが分かる. 汽水域も当然河川であるので、それを説明なく 除外するということには問題がある. 続く内容では放流由来個 体のごく少ない岡山県沿岸域での単位努力量当たりの漁獲量 (CPUE) が、小型定置網とはえ縄の双方で過去 14 年の間に約 8 割減少したと書かれている. しかし, ニホンウナギの加入量に は明らかに数年単位のトレンド(資源変動)があり、トレンド の山の頂上と底辺とを結べばこのような数字になるが、頂上同 士を比べてみると過去12年での減少は約7割弱(すなわち12 年前の約3割強にまで減少)に留まる.本書ではこのように、 根拠となる文献を明示しておきながら, それをさらに誇張する ような表現が随所にみられる. このような論法は一般の読者に 誤解や無用の不安を与える可能性があるため, 好ましいとは言 えない. 第5章では環境省の調査結果に基づいてニホンウナギ の個体密度に影響を与えるのは河川横断工作物(河川横断構造 物)のみであると断言しているが、引用されている原典(環境省、 2016) では一般化線形混合モデル (GLMM) を用いた解析によっ て, 河川横断構造物の積算高のみをモデル式に加えた場合がもっ とも赤池情報量規準 (AIC) が低くなることが指摘されている に過ぎない. このことは,河川横断構造物の積算高以外の要因 がニホンウナギの個体数密度に関与しないことを示すものでは ないため、他の要因について論理的精査を行っていないまま断 言することには問題があるだろう. 環境省(2016)の示すとおり, 河川横断構造物の存在が本種の河川内分布に対して影響を与え るという点には同意できるものの, いくつかの文献(例えば, Yokouchi et al., 2008)を参照する限り、本種は目立った河川横断 構造物がなくても上流に向かうにしたがって密度を減少させる 生物であること、環境省(2016)においても全長 240 mm 以上で は河口からの距離をモデル式に加えた場合に最も AIC が低くな ることにも言及されていることから、少なくとも河口からの距 離についても考慮すべきであろう. ニホンウナギは河口からの 距離だけでなく, より小さなスケールでの物理環境によっても その個体数密度を変化させることが示されていることを踏まえ (Matsushige et al., 2019), 冷静な議論が求められる. 著者は環境 省(2016)の結果を論拠に、ウナギの個体数を回復させるため の第一の方法として河川横断構造物の撤去を訴えているが, こ のような構造物の存在が移入種の侵入を防ぎ, 希少生物のサン クチュアリの維持に一定の効果を果たしている場合もあるため(佐 久間ほか, 2008; 村岡ほか, 2011), その対策にあたっては慎重 な検討が求められることも忘れてはならない. 第6章では「ニ ホンウナギが大きく生息域を移動するのは、およそ24 cm まで であることが明らかにされている」とあるが、その原典とされ る Wakiya et al. (2016) は、当該研究の過程で Imbert et al. (2010) を論拠に、小型個体と大型個体とを全長 240 mm を境に区分して解析を行ったに過ぎない。Imbert et al. (2010) はニホンウナギではなくヨーロッパウナギの遡上活性と体サイズとの関係について標識再捕によって検討し、その遡上確率がゼロになる体サイズを全長 240 mm だと結論づけている。しかしその一方で、既往研究の結果を踏まえ、ヨーロッパウナギの遡上活性が変化する全長は水系の規模によって異なる可能性が高いことを述べている。したがって、この引用は適切とは言えない。

第5章では石倉増殖礁(石倉カゴ)事業の批判を展開している. 石倉カゴとは、ニホンウナギを対象とした伝統漁法である石倉 をヒントに、金属や樹脂製のカゴの中に蛇籠のように石を詰め たもので, 現在, 水産庁を含む様々な団体が日本各地で設置を 行なっているものである. 海部氏は本章の中で, 「石倉カゴに集 まるウナギは、カゴが設置される以前からその周辺に生息して いた個体であり」と断言し、このような効果のないものを水産 庁が行なっていることについても苦言を呈している. 河川感潮 域に設置される石倉(漁業者が設置したもの)には上流の淡水 域から降りてきた銀ウナギ(降海に備えて成熟が進行したもの) も入ってくる. 人間の生活空間と近い河川感潮域では岸際の護 岸化やダム等の河川横断構造物による土砂供給量・質の変化に 伴う河岸・河床の環境劣化(物理環境の単純化)が大きい. こ のことは, 少なくとも隠れ家が少なくなることで, 鳥などの天 敵に狙われやすくなる河川感潮域において, 石倉がシェルター として一定の効果をもつことを示唆している. たしかに、ニホ ンウナギの生息環境改善のためであるとして, 効果の十分検証 されてないものを先走って利用したことには問題があるが、水 産庁は同時にあくまで効果検証の段階(予防的取組)であるこ とを明記している(水産庁, 2017). にもかかわらず, 一般書の 中ではじめから効果がないもののように批判することは適切と は言えない. 著者の一連の批判の中には「隠れ入ることによっ て消費されるエネルギーを節約することが、ウナギが増えるこ とにつながるはずがない」(筆者要約)というものもあるが、節 約できたエネルギーを成長や成熟,繁殖に投資できる可能性を 考えると、これも十分な検証がないまま断言することはおかしい. なお本書では石倉カゴ同様に単なる隠れ家で, 設置しても増殖 上効果のないものとしてタコツボを挙げているが、マダコにとっ てのタコツボにも、捕食者からの攻撃を避ける隠れ家という一 面もあるだろう. またタコツボはマダコの隠れ家となるととも に産卵床となっている(井上, 1969; 内田ほか, 2005). 本書は これまでにない事実の描写や (賛否はともかくとして) 将来へ のすぐれた提言を含むだけに, このような誇張的な表現が散見 されることに残念な気持ちを禁じ得ない. 筆者も現状のニホン ウナギを取り巻く状況を苦々しく思っているうちの一人である.

謝辞

本稿を執筆するにあたり、九州大学大学院の望岡典隆氏と松重一輝氏、ならびに福岡県保健環境研究所の中島 淳氏には文献を紹介いただくとともに適切な助言を受けた。大阪府立環境農林水産総合研究所の木村祐貴氏には文献を紹介いただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

引用文献

Imbert, H., J. Labonne, C. Rigaud and P. Lambert. 2010. Resident and migratory tactics in freshwater European eels are size-dependent. Freshwater Biol., 55: 1483-1493.

井上喜平治. 1969. タコの増殖. 水産増殖叢書 20. 日本水産資源保護協会, 東京. 50 pp.

Kaifu, K., K. Yokouchi, T. Higuchi, H. Itakura and K. Shirai. 2018. Depletion of naturally wild Japanese eels in Okayama, Japan, revealed by otolith stable isotope ratios and abundance indices. Fish. Sci., 84: 757-763

環境省. 2016. 平成 27 年度 ニホンウナギ保全方策検討委託業務 報告書. 環境省自然環境局, 東京. 229 pp.

Matsushige, K., Y. Yasutake and N. Mochioka. 2019. Spatial distribution and habitat preferences of the Japanese eel, *Anguilla japonica*, at the reach and channel-unit scales in four rivers of Kagoshima Prefecture, Japan. Ichthyol. Res., doi: 10.1007/s10228-019-00704-x.

村岡敬子・三輪準二・高橋政則. 2011. 遺伝情報に基づいたニッコウイワナの交雑履歴の推定と移植. 土木技術資料, 53:34-37

佐久間維美・國松史裕・土谷 卓・川村真紀子・藤田 弘. 2008. もぐり堰による侵略的外来魚の遡上抑制実験. 環境技術, 37:61-67.

水産庁. 2017. ウナギをめぐる状況と対策について. 水産庁, 東京. 24 pp.

鈴木智彦. 2015. ウナギ密漁 業界に根を張る「闇の世界」とは. 株式会社ウェッジ, 東京. 53 pp.

内田喜隆・吉村栄一・木村 博. 2005. 山口県瀬戸内海域におけるマダコの生態と資源変動. 山口県水産研究センター研究報告. 3:45-54.

Wakiya, R., K. Kaifu and N. Mochioka. 2016. Growth conditions after recruitment determine residence emigration tactics of female Japanese eels *Anguilla japonica*. Fish. Sci., 82: 729–736.

Yokouchi, K., J. Aoyama, H.P. Oka and K. Tsukamoto. 2008. Variation in the demographic characteristics of yellow-phase Japanese eels in different habitats of the Hamana Lake system, Japan. Ecol. Freshw. Fish, 17: 639–652.

(日比野友亮 Yusuke Hibino:〒805-0071 福岡県北九州市八幡 東区東田 2-4-1 北九州市立自然史・歴史博物館 e-mail: yusukeelology@gmail.com)

魚類学雑誌 66(2):270-272 2019 年 11 月 5 日発行

シーボルトが見た日本の水辺の原風景. —細谷和海(編著). 2019. 東海大学出版部, 平塚. 270 pp. ISBN978-4-486-02095-0. 3,800 円 (税別).

本書は生物多様性の保全という視点からシーボルトが収集した魚類コレクションを研究し、失われた日本の水辺の原風景を復元する試みの一環として出版された。シーボルトやシーボルトが収集した標本(シーボルト・コレクション)については、様々な出版物がある。これまでのシーボルト・コレクションに関する出版物は、標本収集の経緯や標本の分類学的検討に関するものが多かった。しかし、本書は淡水魚類に焦点を当て、シーボルト・コレクションという幕末の自然史標本を生物多様性や環境保全の視点から再検討している。標本は研究資源であると同時に、過去のタイムカプセルであり、現在の自然環境を検討したり、未来の自然環境や生物の状況を予測したりするためのツールとなることは、今やよく知られていることである。シーボルト・

コレクションには、幕末期の日本産魚類がかなりまとまって収蔵されているため、収集された当時の魚類相や自然環境を知るための情報を有している。本書の編者や著者は、標本そのものから過去の魚類相を検討し、さらには往時の自然環境を推測するという挑戦的な課題に取り組み、かなりの成果を挙げたと言えよう。このような挑戦を行った編者・著者に敬意を表したい。本書は本文(3部17章)とシーボルトが持ち帰った淡水魚類27種(金魚も含む)の図譜及び淡水魚類標本一覧から構成されている。著者は10人で、担当した章のタイトルは以下のようになっている(敬称略)。

第1部シーボルトと魚類分類学:第1章保全分類学のすすめ(細谷和海);第2章シーボルト・コレクションから中村守純まで(藤田朝彦);第3章ドイツ・オランダにおけるシーボルトの活動歴(朝井俊亘);第4章『日本動物誌』制作におけるシーボルトの活動歴(滝川祐子);第5章『日本動物誌』における川原慶賀の役割(滝川祐子);第6章シーボルトは魚類標本をどのくらい持ち帰り,どこに保管されているのか(滝川祐子・吉野哲夫).

第2部江戸参府に見る水辺の原風景:第7章長崎から江戸までのシーボルトの足跡(朝井俊亘);第8章シーボルト・コレクションにおける「NAGASAKI」(新村安雄);第9章シーボルトが見た嬉野の淡水魚(川瀬成吾);第10章シーボルトが見た淀川の原風景(川瀬成吾);第12章シーボルトが見た京都伏見の原風景(朝井俊亘);第13章シーボルトが見た琵琶湖の原風景(川瀬成吾);第14章トキのいた濃尾平野の田んぼ(新村安雄).

第3部取り戻せ水辺の原風景:第15章シーボルトの金魚と江戸時代後期の金魚品種改良事情(根來央);第16章ダム建設から「シーボルトの川」を守る(新村安雄);第17章シーボルトに学ぶ自然再生(細谷和海).

第4部シーボルトが持ち帰った魚たち [図譜] (27種の淡水 魚類を収録).

第1部の主な役割はシーボルトとシーボルト・コレクション を紹介することであるが、第1章では分類学が保全生物学にとっ て重要な役割を担っていることを指摘すると同時に,「保全を念 頭に置いた分類学」に対して「保全分類学Conservation Systematics という名称を提案したい」と述べている. しかし, Conservation Systematics あるいは Conservation Taxonomy という用 語は既存の出版物で使われているため(例えば、クモ類につい ては Rix et al., 2018; 両生類については Goebel, 2005; 鳥類につい ては Price and Hayes, 2009; Reynolds and Hayes, 2009), 既往の文献 に言及するすべきであった. 第2章ではシーボルトをはじめと した内外の研究者によって構築された日本産淡水魚類のコレク ションについて簡潔に紹介している. 紙幅の制限があったためか、 日本産淡水魚類の標本を所蔵する滋賀県立琵琶湖博物館, 倉敷 市立自然史博物館, 富山市科学博物館などに言及していないの は残念である. さらに、最近では生物多様性情報に関するデー タベースの役割が重要になっているため、日本国内の自然史標 本を検索できるサイエンスミュージアムネット (S-net http:// science-net.kahaku.go.jp/) や全世界の生物多様性情報 (標本を含む) のデータベースである地球規模生物多様性情報機構(GBIF https://www.gbif.org/) に触れるべきであったろう. 第3章から6 章では、シーボルトの経歴やシーボルトが収集した魚類標本の 意義、『日本動物誌』の制作過程や使用された図と川原慶賀が描 いた図との関係について述べられている. 第5章の川原慶賀の 図と『日本動物誌』の図版に関する検討内容は新たな情報を含 んでおり、きわめて興味深い.

第2部はシーボルトが江戸参府の往路・復路で訪問した土地 の風物やそこで収集した魚類を扱っている。第7章は第2部全 体の序章となっていて、シーボルトが魚類を収集したと思われ る地域を簡潔に紹介している. ただ, 残念なことにシーボルト が辿った往路・復路の地図が本章に示されていない。第4部に 江戸参府行程の地図が掲載されているが, その地図に滞在先を 追加して、本章に含めるべきであった、第8章では、シーボル トやビュルガーが長崎周辺のどの地域から淡水魚を収集したか を論じている. 彼らは彼杵代官であった川原悠々と交流があっ たと思われることや、当時の交通手段と河川環境の検討に基づ いて、大村湾に流入する河川から淡水魚を収集した可能性が高 いと推論している。第9章ではシーボルトが往路で滞在した嬉 野において温泉の成分分析を行ったことや嬉野の淡水魚に言及 していることを紹介している. これらの事実は、シーボルトが 嬉野周辺から淡水魚を収集したことを示唆しているが、シーボ ルト・コレクションに収められている淡水魚のどの魚種が嬉野 で採集されたかは不明である. そのため、現在の嬉野周辺の塩 田川で記録されている淡水魚との比較を行い、候補となる淡水 魚をしぼり込んでいる.

第10章ではシーボルトが大阪滞在中にどのようにして動物標 本を入手したかについて、日記などに基づいて検討している. ニホンオオカミのタイプ標本やカメ類の標本入手に関する興味 深いエピソードが紹介されているが、残念ながら魚類に関して は本章で述べられていない。第11章では現在の淀川水系の淡水 魚類相に基づいて、シーボルトの時代にどのような魚類が生息 していたのか、そして、その当時の水辺環境はどのようなものだっ たかを推論している. 現在の魚類相や生息環境の劣化に関して は適切に言及しているが、シーボルトが訪問した当時の水辺環 境についてはシーボルト自身のノートが紹介されているのみで ある.「淀川の原風景の復元」のためには、考古学者や歴史学者 との連携が必要であろう. 第12章では京都・伏見・草津につい てシーボルトがどのような経路を辿り、どのような場所を訪問 したかについて、丁寧に記述している. しかし、シーボルトが 収集したであろう淡水魚に関する記述がないのは残念である. 第13章ではシーボルトが訪問した当時の琵琶湖周辺の風景や鳥 類・淡水魚類に関して述べている.シーボルトはトキの剥製2 個体を購入しているため、当時の琵琶湖周辺にはトキが生息で きる環境があったことが分かる. また, 現在, 琵琶湖に生息す る魚類や他の訪問地の魚類との比較検討によって、琵琶湖周辺 でシーボルトが収集した魚類はコイ, アブラボテ, カネヒラ, ヌマムツ, モツゴ, ニゴイ, アユモドキ, ギギであろうと推論 している. 第14章ではシーボルトの日記に基づいて、濃尾平野 にもトキが生息していたことを述べている. 一方, シーボルト・ コレクションには濃尾平野の魚類は含まれていない. シーボル トー行は濃尾平野滞在中に植物標本を確認したり、植物に関す る情報を収集したりするために多くの時間を割かねばならず、 魚類を収集することができなかったのであろうと推論している.

第15章ではシーボルトが収集した金魚について述べている. 江戸時代に金魚が盛んに飼育されていたことはよく知られており、多くの書画や文献に収録されている.しかし、当時の状況を考えれば当然ではあるが、江戸時代の日本人は金魚の標本を保存しなかった.一方、シーボルト・コレクションには金魚の標本が35個体収蔵されている.本章では、これらの標本の調査と江戸時代の文献によって、当時の育種技術や金魚標本の入手地について検討している.第16章ではシーボルト・コレクションの検討によって、当時の河川環境が残されている川を推定している. そして、そのような川を「シーボルトの川」と表現している。その一例として、長崎県川棚町の石木川を挙げ、生物多様性保全や生態系保全のために重要であることを述べている。第17章ではシーボルトが江戸参府の折に見た自然景観は街道沿いの里山であったと述べている。生物多様性における里山の重要性は広く知られているが、圃場整備などによって水田や水路の生態系は激変し、魚類を含む多くの水生生物が消滅しつつある。現在の状況からシーボルトが見た田園風景に戻ることは不可能であるが、環境保全に配慮した工法を行うなど、生物多様性や生態系の保全を重視することの重要性が述べられている。

第4部は、それぞれの魚種の写真や図、そして、解説文から 構成されている. 解説文には、基本的に3つの見出しがあり、 「シーボルト標本」、「ニホンウナギの原記載」、「ニホンウナギが 棲む水辺の原風景」のように、扱う魚種名が見出しに含まれて いる.「シーボルト標本」と「○○の原記載」の項目では、主に 分類学的な課題が検討されている. それぞれの魚種に関する解 説を読むと、依然としてシーボルト・コレクションには検討す べき課題が残されていることが分かる. 残念なことに, 3つ目 の見出しに不統一が見られる. ニホンウナギでは「ニホンウナ ギが棲む水辺の原風景」となっているが、コイでは「コイの棲 む原風景」となり、ミナミメダカでは「ミナミメダカが棲息す る原風景」となっている.同じ内容を扱っているのだから、見 出しは統一すべきであった。また、3つ目の項目で述べられて いることは「○○が棲む水辺の原風景」というよりは、それぞ れの魚種の分類学的課題や棲息場所の紹介, 生態的情報などで あり、「備考」という見出しの方がふさわしいように思える. な お、伊藤大樹と森宗智彦は第1部から第3部の著者ではないが、 第4部の魚種解説の著者となっている(伊藤:オイカワ,ハス; 森宗:カワムツ,ヌマムツ,アブラボテ,カネヒラ).

引用文献に関する誤りは少ないとは言えない。引用文献と本文に出てくる文献の著者や出版年が一致しない、引用文献にある文献が本文にない、本文に引用されている文献が引用文献にないなど、少なくとも57件の誤りがある。また、第1部から第

3 部では「引用文献」という見出しを用いているが、第4部では「参考文献」となっている。さらに、本文中の誤字や脱字もかなりある。また、前述したように、水辺の原風景を研究するためには、学際的な研究が必要となる。すなわち、魚類学者、考古学者、歴史学者、さらには河川工学者の連携が必要であろう。

上記のように本書には問題もあるが、内容的には従来にない 視点から興味深い検討がなされている。『日本動物誌』が出版さ れてから約180年、シーボルトが魚類を収集してから200年弱 が経過しているが、本書の編者と著者は、シーボルト・コレクショ ンを現代的な視点から研究すれば、新たな成果が得られること を本見事に示してくれた。多くの魚類学会会員に本書を一読さ れることを勧めたい。

引用文献

Goebel, A. 2005. Conservation systematics: The *Bufo boreas* species group. Amphibian declines—the conservation status of United States species. Pages 210–221 in M. Lannoo, ed. University of California, Berkeley.

Price, M. R. and W. K. Hayes. 2009. Conservation taxonomy of the Greater Antillean Oriole (*Icterus dominicensis*): Diagnosable plumage variation among allopatric populations supports species status. J. Carib. Ornithol., 22: 19–25.

Reynolds, M. B. and W. K. Hayes. 2009. Conservation taxonomy of the Cuban Parrot (*Amazona leucocephala*): Variation in morphology and plumage. J. Carib. Ornithol., 22: 1–18.

Rix, M. G., J. A. Huey, S. J. B. Cooper, A. D. Austin and M. S. Harvey. 2018. Conservation systematics of the shield-backed trapdoor spiders of the nigrum-group (Mygalomorphae, Idiopidae, Idiosoma): Integrative taxonomy reveals a diverse and threatened fauna from south-western Australia. Zookeys, (756): 1–121.

(松浦啓一 Keiichi Matsuura: 〒 305-0005 茨城県つくば市天久 保 4-1-1 国立科学博物館 e-mail: matsuura@kahaku.go.jp)

図書紹介·New Publications

魚類学雑誌 66(2):272-273 2019 年 11 月 5 日発行

八郎潟・八郎湖の魚-干拓から60年,何が起きたのか. 一杉山 秀樹(著). 2019. 八郎潟・八郎湖学叢書①,さきがけブックレット,秋田魁新報社,秋田. 119 pp. ISBN 978-4-87020-408-9. 1,300円(税別). 潟は呼吸する. 昭和32年に始まった国策八郎潟干拓事業で昭和36年に防潮水門が設置されたことにより,潟は淡水を吐くだけで海水を吸うことをやめてしまった.かつて日本第2位の面積を誇った八郎潟は,現在約5分の1の淡水湖,八郎湖および関連水路を残すのみとなっている. 昭和52年から秋田県内水面指導所に勤め,最終的には秋田県水産振興センター長として平成22年に退職した著者は,八郎湖における増殖試験や調査研究を行う傍ら,八郎湖への流入河川および船越水道(八郎湖の排水路,汽水域)を含めた水

域の生物調査を行った.その成果を小図鑑として整理することに加えて、八郎潟から八郎湖に至る魚類相、水産資源、漁業実態、食文化等の変遷を調査し、この度のブックレットに纏めた.海水の吸い込みをやめたことの水産資源への影響は大きい.ヤマトシジミ資源はほぼ壊滅.またニホンイトヨの激減は本種の全国における減少と軌を一にする、というよりそのきっかけになったのではないかとすら思えてしまう.一方でゼニタナゴやシナイモツゴ等がいなくなったことに関しては、生態系の構造変化や外来魚の影響などの複雑に絡み合う要因を魚種ごとや生活史ごとに考慮しなければなるまい.魚類相の変化もさることながら、漁獲量は最大時の約1万6千トンから約80分の1に、漁業者数も最多時の約6千5百人から約40分の1に減少し、それに伴って多様であったはずの食文化も失われつつある.著者は、自ら見たことと調べたこ